

ちほの おしゃべりタイム



みる将も楽し



オフィスPrima 代表
フリーアナウンサー
ビジネスマナー講師

とおる ちほ
透 千保

東海地方の各放送局(岐阜放送/ぎふチャン、FM Gifu、東海ラジオ、メ〜テレなど)で数多くの番組やニュースを担当。司会、ナレーションの他、名鉄電車、名古屋営地下鉄など、公共交通機関のアナウンス放送に携わる。一方、企業・大学において、ビジネスマナー、電話対応などの研修講師を務め、人材育成に取り組んでいる。

先月、「全国将棋サミット2022」が岐阜県関ヶ原町で開催され、司会を務めさせていただきました。日本将棋連盟の主催で、将棋の普及に取り組む全国の自治体が交流し連携を深めてもらおうと毎年開催しているものです。今年は全国から20の自治体が参加し、将棋を通じた地域活性化の取り組みなどを発表しました。その他、プロ棋士による講演やトークショー、席上対局が行われ、県内外から多くの人が訪れました。

将棋の起源は古代インドのゲーム「チャトランガ」だという説が有力で、これが世界各地に伝わり、西洋の「チェス」、中国の「シャンチー」、朝鮮半島の「チャンギ」、タイの「マークルック」、そして日本の「将棋」などに発展したと考えられています。これらのゲームはよく似ていますが、一番の違いは、将棋では取った敵の駒を自分の駒として再び使えるという点でしょう。これは日本の将棋だけの特徴であり、このルールの成立によって、将棋は「最も複雑で奥の深いゲーム」といわれるようになったのです。

取った駒を再利用する「持ち駒」のルールは、戦国時代の合戦で投降した敵を自軍の先鋒として使っていたという歴史的事実から転用されたという説もあります。太平洋戦争直後にはGHQ（連合国軍総司令部）によって、このルールが非人道的であると問題視され、将棋が禁止されそうになったそうです。しかし、将棋ではどの駒にもそれぞれの役割が与えられるだけでなく、敵に取られたとしても、また次の活躍の場が与えられているのだと反論して認められたのだとか。こうしたエピソードからも、将棋は日本文化の精神性を表しているというのうなずけます。

これまで将棋に縁のなかった私ですが、この機会に、小さな玩具の将棋盤を購入して学ぶことにしました。ルールを覚えて実際にやってみると、自分の駒を守るだけではゲームが展開せず、さりとて相手を攻めようとするとすぐに先を読まれて行き詰まってしまいました。プロ棋士は何10手先までも読み進めるそうですが、どうやって考えているのか想像もつきません。また、プロ同士の対局を観戦して、勝負では形勢に一喜一憂しない、冷静な判断力と忍耐力が必要なのだと思います。

当日は、岐阜県出身の長沼洋八段をはじめ、昨年春に18才でプロデビューを果たした高田明浩四段、姉妹の山口稀良莉女流1級と山口仁子梨女流2級、岩佐美帆子女流2級なども登場し、岐阜県からも棋士や女流棋士が輩出されていることに大きな期待が寄せられました。

最近「みる将」と言って、自分では将棋を指さずに、対局の観戦を楽しむ将棋ファンも増えているそうです。私も、駒の動きを少し学んだだけで将棋を観るのが楽しくなり、自分の世界が広がったように感じました。今後は、県出身の棋士の方々がどのように活躍されるのか見守りたいと思います。